

第4学年 道徳学習指導案

日 時 平成20年10月17日(金)5校時
児 童 男19名 女12名 計31名
指導者 菅原 知子

- 1 主題名 思いやる心を伝えよう 2—(2) 思いやり 親切
- 2 資料名 「心の信号機」 (みんなのどうとく 4年 学研)

3 主題設定の理由

(1) 価値について

第3学年及び第4学年の内容の2「主として他の人とのかかわりに関すること」の項目(2)は、「相手のことを思いやり、親切にする」となっている。ほかの人に接するときの基本的姿勢に関するものであり、相手に対する思いやりや親切な心もち実践のできる児童を育てようとするものである。思いやりとは、他人の喜び、悲しみ、痛み、立場などを推察しその気持ちが理解できるということであり、単なる憐れみや相手に優しく接することだけを指すのではない。相手の状況をつかみとり、共感し、自分と一体となって考えようとする気持ちを育てることが、思いやりの第一歩である。この思いやりに根ざした実践、自覚的行為が他者に対する親切である。社会生活の中でみんなが自己中心的な考え方で暮らしては共存は成り立たない。相手を思いやり親切にしようとする気持ちをもつことが社会生活の基本である。

ここでは、中学年という発達段階を踏まえ、目の前の困っている人や悲しんでいる人に対して、その立場や気持ちを推し量り、「助きたい」「親切にしたい」という思いをもつ心を育み、意欲的に実行しようとする態度を育てたいと考える。

(2) 児童について

4年生の児童は、明朗快活な児童が多く、様々な活動において、男女協力して取り組むことができる。また、帰りの会では、困っているとき友達に手を貸してもらってうれしかったことや、友達の頑張りなどを見つけて発表することができる児童がいる。しかし、助けてもらった時にお礼はするが、帰りの会でみんなに広めるところまで、できない児童もいる。

そんな4年生に、本主題にかかわる調査を質問紙でしてみたところ、31名中29名の児童が困っている人を見かけたことがあると答えた。そのうち困っている人を見かけたら、必ず助けてあげると答えた児童が6名、助けてあげられないときもあるという児童が21名、助けを求められたときは助けるという児童が2名だった。助けてあげられなかったときの理由として、「知らない人だったので勇気が出なかった。」、「急いでいた。」、「周りの目が気になった。」ということが挙げられた。また、「困っていた人はどんなことで困っていたか。」という質問の答えには、本資料に登場するような「体の不自由な人」に出会ったという児童はいなかった。このことから、体が不自由な人とかかわる機会が少ないといえる。しかし、知らない人を助けるということは、思いやりの心とともに勇気があることだということには分かっている。このことから、4年生の児童も、この資料のように困っている人に出会ったときの「ぼく」のように、声をかけるべきか迷ってしまうだろうという実態が見えてきた。このような児童の実態から、本時の指導を通して困っている人に対して思いやりの気持ちをもって親切にしようとする態度を養いたい。

(3) 資料について

本資料は、横断歩道で目が不自由な男の人と出会ったときに手助けするべきかどうか迷ったぼくの気持ちを描いたものである。主人公「ぼく」は信号が変わってもいつまでも横断歩道を渡らない目が不自由らしい男の人と出会う。気にかかりながらも、「ぼく」は横断歩道を渡ってしまう。渡り終えて振り返ると、男の人はまだ、信号機の柱をつかんだまま立っているので引き返そうと思った。ところがいざ引き返すと、なかなか声がかげられない。迷った末、「ぼく」は思い切って男の人に声をかけ、手を引いて渡る手伝いをしてあげたという内容である。目の不自由な人を思い引き返した「ぼく」であるが、相手が見知らぬ人ゆえに、声をかけるべきかやめるべきか迷う。これと似たような状況は日常生活においても経験する。相手の状況を考えて親切にすることは容易なことではない。それは、相手を心から思いやる気持ちをもつからこそできる行為である。本資料は思いやりの気持ちを持ち、親切な行動をしようとする態度を養うのに適切な資料である。

4 本時の指導

(1) 研究主題との関わり

①本時の位置づけ（道徳的実践活動の活動計画より）

	道徳的実践活動の ねらい	段階1 道徳的価値への 気付き	段階2 活動・体験	段階3 道徳性の高まり
9 ・ 10 ・ 11 月	福祉に関する課題を追究することによって、様々な方々の思いや願いを感じ取り、思いやりの心をもって、親切にしようとする心情を育てる。 老人介護保健施設での交流をとおして、お年寄りの方々の思いや願いを感じ取り、思いやりの心情を育てる。	【国語の時間】 「手と心で読む」 目の不自由な人たちの工夫や努力を知り、その願いや思いについて感心をもつ。 点字体験をし、障害のある人の工夫や努力について実感させる。	【総合的な学習の時間】 「はじめようボランティア」 高齢者疑似体験 高齢者疑似体験をし、お年寄りの立場になって、介護老人施設を訪問する計画を立てさせたりして、自分の課題をもたせる。 ゆうゆうの里訪問 老人介護保健施設での交流をとおして、お年寄りの方々の思いや願いを感じ取り、思いやりの心情を育てる	【道徳の時間】 2 - (2) 思いやり・親切 「心の信号機」 困っている人に対する思いやりの気持ちを持ち、様々な場面で実践しようとする心情を育てる。 本時

② 指導の手立て

本時は、第3段階「道徳性の高まり」にあたる。

第1段階では、国語科「手と心で読む」（光村図書：第4学年）の学習で、文字を失うことのつらさと点字を獲得することで得た喜び、人間の知恵と障害のある人の努力が困難を乗り越えてきたこと等を読み取ったうえで、点字体験学習や目の不自由な人のための施設などについて調べ学習をし、目の不自由な人が同じ社会で生活していることに気付かせた。児童は、点字の表と見比べながら、文字を読み取るだけでも難しいのに指先だけで点字を読み取ることの難しさに目が不自由なことのつらさを実感していた。また、目の不自由な人のための施設を調べる中で、身近に目の不自由な人のために工夫がたくさんあることから、目の不自由な人の「健常者と同じように生活したい。」という願いを感じることができた。

第2段階では、総合的な学習の時間「はじめようボランティア」の中に、老人介護保健施設の訪問を位置づけた。事前に、「お年寄りに接するとき心がけなければならないことは何か。」を考えることができるように、高齢者疑似体験を行った。児童は、予想以上に体が思うように動かないことを実感し、お年寄りの立場になって聞こえるように話したり、優しい気持ちで接したりしたいという気持ちをもつ児童が増えた。このことから、体が不自由な人の立場に立って、本資料を読むことができるのではないかと考えた。そのあと、お年寄りにどんなことをしたら喜んでもらえるか考えた。耳の不自由な人にも楽しんでもらえるようにダンスや手遊び歌を練習した。また、寝たきりの人もいるということから全員に飛び出すカードのプレゼントの用意をした。しかし、交流の当日は、お年寄りに優しくしてあげたいと思っても、初めて会う人に自分から進んでなかなか積極的に声をかけられない児童も多かった。このことは、本資料のぼくの立場になって、気持ちを考えることができるのではないかと考える。

第3段階にあたる本時では、体験活動を生かすことにより価値の自覚をよりいっそう深め、自分がこれまで行ってきた事の中に価値を見出させたいと考えた。そこで、導入段階で体験活動を想起させ、価値への方向付けを図りたい。また、展開の段階で目が不自由と思われる男の人を見たときの「ぼく」の気持ちに共感させるため老人介護施設を訪問したときの、見知らぬお年寄りに声を思うようにかけることができなかつた気持ちを思い起こさせたい。【体験活動の想起】

展開では、中心発問に対する考えをワークシートに書く時間を設け、児童が葛藤する時間を確保し、全員が自分の考えをもたせたいと考えた。【書く活動】さらに、終末段階では施設のお年寄りの方からの手紙（または、施設の方からの手紙）を紹介し、今までの自分の行動に価値を見出したり、これからの自分のあり方を考えたりするようにさせたいと考えた。【ゲストティーチャーとの学習活動】

(2) ねらい

困っている人に対する思いやりの気持ちを持ち、様々な場面で実践しようとする心情を育てる。

(3) 展開

	学習活動と主な発問	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 5分	1 老人介護保健施設を訪問したときの活動してみたの気持ちを想起する。 ○活動をしてみてどうだったか。	・緊張した。 ・つかれた。 ・進んで交流できなくて、楽しませてあげられなかった。 ・本当に喜んでもらえたか不安だ。 ・おじいさんがうれしそうにしていたのでよかった。	・活動の様子を写真で提示して想起させ、お年寄りに声をかけるときの気持ちと、資料のぼくの目の不自由な男の人に対する気持ちと重ね合わせたい。 【体験活動の想起】
展開 30分	2 資料「心の信号機」を読んで話し合う。 (1) 横断歩道を渡り終えようとした「ぼく」のたまらない気持ちとはどんな気持ちだろう。 (2) いざ歩き出すとゆっくりとなってしまう「ぼく」はどんなことを考えていただろうか。	・見て見ぬふりができない。 ・交通事故にあったら大変。 ・渡るためには手を貸してあげなくては。 ・知らない人だ。 ・はずかしい。 ・なんて声をかければいいんだろう。 ・余計なお世話かもしれない。 ・勇気を出さなければ。 ・まわりにはぼくしかいないし、自分が助けなければ。 ・困っているのだから、助けなければ。	・男の人のことが気になってそのまま見過ごすことができない主人公の気持ちを捉えさせる。 ・児童が葛藤する時間を確保し、全員が自分の考えをもたせたい。 【書く活動】 ・声をかけたいと思いながらなかなか声をかけられないでいる主人公の気持ちに共感させる。 ・男の人を間近に見ていたらどうしても手助けをしたいという気持ちになったことに気付かせる。

	(3) 男の人の後ろ姿を見送りながら、ほっとしているぼくは、どんな気持ちだっただろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・恥ずかしかったけど声をかけてよかった。 ・無事に渡れて安心した。 ・お礼を言われてうれしいな。 ・役に立ててよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぼく」が親切な行動をした後の満足感を感じ取らせる。
終末10分	3 老人介護施設のお年寄りの方からの手紙を聞き、感想をもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・こんどはもっとやさしくしてあげたい。 ・やさしくしてよかったな。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちのしたことすばらしさについて実感させたい。 <p>【ゲストティーチャーとの学習活動】</p>

(4) 板書計画

絵	絵	絵	交流の写真
<ul style="list-style-type: none"> ・無事にわたれてよかったな。 ・お礼を言われてうれしいな。 ・役に立ててよかった。 	<p style="text-align: center;">男の人の後ろ姿を見送る僕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕が助けなくては。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はずかしいな。 ・なんて声をかけたらいいのかな。 ・よけいな世話かもしれない。 <p style="text-align: center;">いざとなるとゆっくり歩くぼく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手を貸して上げなくては。 	<p style="text-align: center;">心の信号機</p> <ul style="list-style-type: none"> ・緊張した。 ・うまく話しかけられなかった。 ・楽しかった。

5 資料分析
《主要場面》

資料名

「心の信号機」
《主人公の意識》
(みんなのどうとく 4年 学研)
《児童の意識》

《意識の焦点化》

《主な発問》

